

# 第15～16次(2013年3・5月) 東日本大震災復興支援ボランティア

## ～ 3.11を忘れない～ 参加者の想い・感想



絆



連 合 長 野

## 《 目 次

P1～	第15次(2013年 3月 9日出発)－南三陸町
P23～	第16次(2013年 5月10日出発)－南三陸町
P45～	追悼の歌・しあわせ運べるように
P46～	南三陸町の被害状況など
P52～	多賀城市社協DVDのメッセージより
P55～	第1次から第16次までの構成組織別参加者数
P56～	第1次から第16次までの組合別参加者数など
P58～	あとがき

# 第15次復興支援ボランティア

派遣期間	2013年 3月 9日(土)～11日(月)				
派遣場所	宮城県南三陸町	派遣人数	40名	長電全体	※貸切

## 《参加者氏名》

班	氏名	所属組織名	班	氏名	所属組織名		
1	常盤真紀子	自治労飯田市職員労組	2	原 智之	自治労松本市職員労組		
	野牧 司	JAM甲信平和時計労組		鶴田 克也			
	脇坂 翔太	組		川窪 茂			
	島岡 洋幸	自動車盟和産業労組		藤牧 巧子			
	小原 章史	自治労駒ヶ根市職員労組		山崎 裕美			
	小池 陽愛	組		阪下多賀子		電力総連東京電力労組	
	松下 真奈	自治労中川村職員労組		岡田 純子	松本総支部		
	伊藤 雪美			3	魚住 友紀	全労金長野県労金労組	
	原 文彦				中村 憲央		
	新田 貴久				塚原 和郎		
	田淵 貴久				電力総連関西電力労組	水野 辰也	自治労長野市職員労組
	岡崎 和樹				木曾川支部	森川 弘	電力総連中部電力労組
	土岐 誠				大関 和夫		
	滝澤 孝						
2	清水 博人	農団労上伊那労組	3	増井 香織	電力総連東京電力労組		
	埋橋 典子	連同上伊那地協事務局		土屋 春美	農団労須高労組		
	高木 保夫	自治労県職員労組諏訪支部		小坂 諒子	全労金長野県労金労組		
	高木 栄子	支部		宮澤 利枝			
	戸井田直人	全労金長野県労金労組		木内 毅		農団労佐久浅間労組	
	安藤 伸	自治労松本市職員労組		成沢 勇次	連合長野事務局		
	小野 良太						

## 《3日間のスケジュール》

3月 9日(土) 晴れ

- 0:30 キラヤ伊賀良店を出発
- 1:25 上伊那地協事務所前を出発
- 2:20 みどり湖PAを出発
- 2:50 松本合同庁舎前バス停を出発
- 4:10 長野電鉄旧松代駅を出発
- 4:55 佐久乃おぎのやを出発
- 12:20 南三陸町ボランティアセンター(VC)到着
- 13:00 上の山地区でガレキ撤去作業
- 15:20 作業終了しVC出発
- 15:30 さんさん商店街(津波被害を受けた商店数十店が集まって作った商店街)の南三陸町観光協会にて『ガイドサークル汐風』の語り部・芳賀タエ子さん(兄弟を津波で亡くされる)より、震災当時の話しをスライドも交えてお聞きする
- 17:00 さんさん商店街を出発
- 19:00 ホテルパールシティ仙台へ到着



19:30 団結会

3月10日(日) 曇り一時雨のち晴れ

※SBCが同行取材

- 6:35 ホテル出発  
旧南三陸町防災対策庁舎前で黙禱
- 8:30 南三陸町VC到着
- 9:00 上の山地区でガレキ撤去作業
- 12:00 VC戻り昼食と休憩



1班



2班

- 13:00 ガレキ撤去作業
- 15:00 作業終了しVCを出発
- 15:15 ヤマウチ海産物店で買物  
さんさん商店街で買物
- 16:55 さんさん商店街を出発
- 18:30 ホテルへ到着  
班毎に夕食交流会



3班

3月11日(月) 朝雪のち晴れ

※SBCが同行取材

- 8:00 ホテル出発  
車内で連合宮城塩釜地協の小田島事務局長より  
大震災当時の話や車窓の説明を受ける
- 9:00 名取市閑上地区⇒仙台市若林区(荒浜地区⇒蒲生地区)  
多賀城市⇒七ヶ浜町菖蒲田浜
- 10:30 長電観光のもう一台(一般参加者)と合流  
菖蒲田浜海岸で「慰霊の集い」(黙禱と献花)







11 : 30 七ヶ浜町内を視察し七ヶ浜町社協職員の引地淑子さんより大震災時の話をお聞きする

12 : 30 第1次復興支援物資注文先の星のり店の星陽子さんから御礼の挨拶を受ける



12 : 35 七ヶ浜町災害 VC を出発

14 : 46 東北道安達太良 S A で慰霊の黙禱

18 : 15 佐久乃おぎのやへ到着

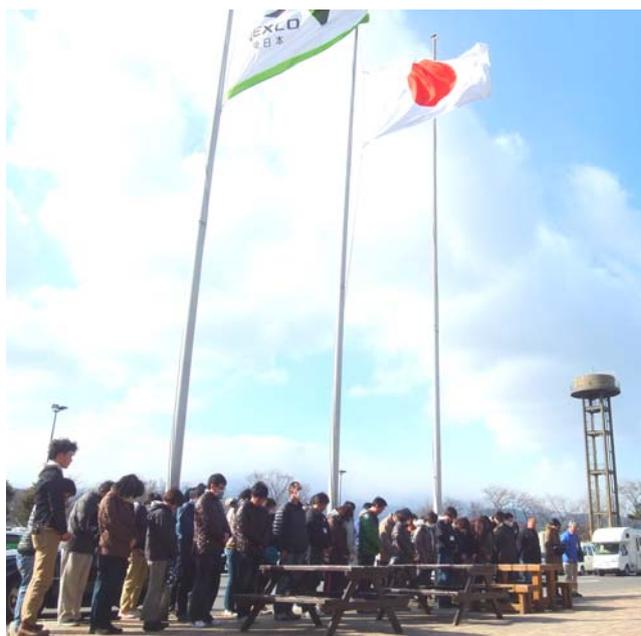
19 : 20 長野電鉄旧松代駅へ到着

20 : 05 松本合同庁舎前バス停へ到着

20 : 25 みどり湖 P A へ到着

20 : 55 上伊那地協事務所前へ到着

21 : 40 キラヤ伊賀良店へ到着



## 《参加者の想い・感想》

### [自治労飯田市職員労組・常盤 真紀子]

今回、初めて東北大震災の復興支援ボランティアに参加させてもらい、たくさんのことを学ばせて頂きました。テレビの報道で見るのと、実際に見るのでは、大違いであり、実際の震災の大きさを身にしみて、感じる事が出来ました。

南三陸町で、瓦礫の撤去作業をやらせて頂きましたが、その中には土ばかりでなく、カーテンや服、家の柱やアスファルト、色んな物がありました。東北の方々の生活がありました。そして、まだ、見つかっていないご遺体もあるということをお聞きして、撤去作業という言葉が簡単には使ってはいけない言葉だということも感じました。

また、語り部の方が、『瓦礫』と言う言葉は、専門用語なのかもしれないけれど、少しキツイ言葉のように感じてしまう、もう少し違った言葉があるといいという思いをお聞きして、私自身もハッとさせられました。もし、自分たちの大切な故郷、暮らしている場所が、同じようになってしまったら、私もそう感じるなあと思いました。大変な思いをした東北の方々しか分からない思いもありますが、ボランティアに実際行ってみなければ、分からないことだったと思いました。

今回のボランティアで、2人の語り部の方のお話しをお聞きし、実際の場所を見て、本当に多くの命が失われ、大切な方々を亡くされ、幸せに暮らしていた場所が一瞬にしてなくなってしまったことを目の当たりにして、色々な思いを感じる事が出来ました。絶対に忘れないように、そして、今回の経験を周りの人に伝えていきたいと思います。本当にありがとうございました。

### [JAM甲信平和時計労組・野牧 司]

ボランティアに参加するのは今回で2回目になります。

前回、若林区で細かい瓦や石の撤去を行ったので今回も同じような作業をすると自分の中では思っていました。

しかし、今回南三陸の作業場所に着いて目に入ったのは、家の木材、金属片、様々な生活用品が地面に散らばっており、その場所は震災直後から変わっていないのではないかというほどでした。

作業をしていると、土の中からも木材などが大量に出てきてスコップとツルハシではとても作業が進みませんでした。

2日間同じ地区で作業をしたのですが、来た時とあまり変わっていなかったのが、津波の被害の大きさを知りました。

まだ作業することは多いので次回も機会があれば参加したいです。

### [JAM甲信平和時計労組・脇坂 翔太]

今回初めて東北の地でボランティアをさせていただきました。テレビ放送では感じる事が出来ないもの、作業を行うことで感じる事がたくさんあると思ったからです。

南三陸町での作業内容は、地上にある物の片づけから地中にある物の撤去でしたが、地上には大きな物があまり見えていなかったのですが、少し地面を掘ると次々と1メートル近い木や鉄の柱等が出てきて驚きました。実働時間は9時間でしたが2メートル四方しか作業が進まず50センチほどしか掘れませんでした。3日間で9時間という作業時間の短さでは全く先が見えないと思いました。

被災地の見学、被災者のお話しを聞いて当時の状態、状況をリアルに感じ取れとても恐怖と悲しみを感じました。家に帰ってからテレビで当時の津波の映像が放送されていましたがもう見たくない

思いました。

このような思いは実際に現地に行かないと分からないものであり、作業を行ったから分かった事だと思います。今しか出来ない事なので是非現地に行って感じ取って欲しい事だと思いました。

#### [自動車総連盟和産業労組・島岡 洋幸]

震災後6月の連合本部、昨年3月の連合長野に続き、今回で3回目のボランティア参加となりました。震災直後のボランティアに参加してから被災地の現状はどうなっているのか、復興の状況はどうなのかと参加させていただいています。また連合長野国民運動環境委員として、連合長野の今後の支援のあり方を考える上でも参加させていただきました。

今回の第15次のボランティアでは、参加募集当日午前中で定員に達したという点では、被災地への関心の高さに驚かされました。TV等の報道は3月11日が近付くにつれ多くなってきましたが、普段ではあまり報道されていないのが現状です。国民の関心も段々薄れてきているように感じます。

今回のボランティア作業は、元住宅地のガレキ拾いを行いました。参加者の多くは手作業の無力感を感じたかもしれませんし、集めたガレキを見て一歩ずつの前進を感じたかもしれません。今回参加者の内十数名が複数回の参加者でしたが、まだまだ支援が必要であり、可能であれば又参加したいと思われたことでしょう。参加者の使命として、次回の参加もひとつですが、被災地の現状を組合員であつたり回りの人々に伝えることが大事だと思います。ボランティアに参加できなくても、被災地の物品を購入したり、被災地に対する関心を持ち続けてもらえる人を増やすよう伝道師となることも使命だと思います。

今回、連合宮城・塩釜地協の小田島事務局長から被災時の非常に辛い、生々しい話を聞くことができました。亡くなった知人の、携帯電話の電話番号やアドレスを消すことが出来ないという話をお聞きして、一見気丈にふるまう被災地で会う方々の心の中には、2年経ってもまだ深い闇が残っていることを感じました。

今後も自分で出来ることを少しでも続けていきたいと思えます。事務局の成沢さん、長電の津金さん、ご苦労さまでした。そしてありがとうございました。

#### [自治労駒ヶ根市職員労組・小原 章史]

まずはじめに、今回参加させていただくにあたり、ご尽力いただきました全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

新聞やテレビ等で取り上げられる回数が少なくなっていることを、自分の中で東日本大震災のことが薄れていくことの言い訳にしなくなかったため、一度この目で現地を見て、感じ、そして自分ができることを見つける目的で参加させていただきました。

3日間を通じ、印象的であった2点を下記に挙げさせていただきます。今後、自分自身で何が出来たかを考え、行動していきたいと思えます。

#### ①東日本大震災を忘れてはいけない。

今回の活動を通じて、私は「初めて」東日本大震災のごく一部を体験できた。現地に立ち、瓦礫を手に取り、凍てつく冷たい風に吹かれ、そして被災者の方からお話を聞くことで、初めてそれを体験できた。

ある被災者の方が言っていた。「ボランティアの方は“去年も来たけど復興が進んでいないですね。”と言う。そんなことはない。毎日ここで生活している被災者は、ボランティアの方のおかげで、足の

踏み場もない状態であった道路を、町を、きれいに片づけてきてくれた。“ボランティアさんたちがいればこそ”という感謝の思いでいる。」と。

自分は、初めて南三陸町に行ってみて、“2年経ってこの進捗か。進んでいない。”と感じた。今回の瓦礫の撤去は1人が半日で2m×2m×1m程度の範囲をきれいにするのがやっと。この土地での作業が終わるのに、いつまでかかるのだろうかと怖くなった。ボランティアは減っており土日中心と聞いたが、確実に人手が足りていない。

よく言われる、「東日本大震災を忘れてはいけない。」という言葉の意味を理解することができた。つきなみな言葉でしか表現できないが、皆が思いを共有し、そしてつなぎ、継続的に支援をしていくことが必要だと感じた。

## ②心のケアが必要。

被災者でもある南三陸町観光協会 ガイドサークルの芳賀タエ子さんのお話の中で「私たちの大切にしていた家や車など流された物たちを安易に「がれき」と呼ばないでほしい。もっと優しい、他の言葉がなかったのかな。」という言葉に衝撃を受けた。

その言葉を聞いた瞬間、「自分はどんなに頑張っても、被災者の方と100%同じ気持ちにはなれないんだ。そもそも、そんな基本的な点から配慮が足りなかったんだ。」と悲しく、胸が苦しくなった。想像を超える絶望的な状況に遭い、それを乗り越えようと努力してきている被災者の方々に、その言葉を聞いて以降、簡単に、気安く、「頑張ってください」と声をかけられなくなった。

また、「被災者同士で再会をしても、相手の状況に気を遣い、うわべだけの会話になりお互いの状況に直接触れられない。ボランティアなど外部の方が来て、聞いてくれると話せる。」とも言っていた。七ヶ浜のVCで被災者されたスタッフの方に話かけたところ、あふれるように震災後のお話が出てきた。いろんな思いが心の中にあるんだと思った。話を聞いて「あげる」なんておこましいが、思いを吐き出させてあげることが、今の被災者の方々には必要なんだと感じた。物理的な支援だけでなく、目は見えない心のケアも復興のひとつであり、これからさらに重要になると感じた。

### [自治労駒ヶ根市職員労組・小池 陽愛]

2年前の3月11日からメディアを通して見てきた被災地での復興支援活動。この三日間、沢山のことを感じ沢山のことを考えた。

南三陸町での作業中、掘っても掘っても出てくるコンクリートや瓦、木材、ガラスの破片、そして食器や洋服。泥まみれになった電車のおもちゃを見つけた時、こぼれそうな涙をこらえながら再び懸命にスコップを動かした。誰かが築き上げてきた生活の場が津波によって一瞬で流され、2年経った今もそこに埋もれたままになっていることを目の当たりにして、自然災害の爪痕を人の手によって元に戻していくことがどんなに大変で、どんなに時間のかかることかようやくわかった。



南三陸町のほかに仙台市の荒浜、名取市の関上、塩釜市、七ヶ浜などを視察させていただき、被災地と言っても被災状況によって撤去作業などの進行状況も違い、すでに新しい家が建った地域もあれば、津波で破壊されたままの家が残っている地域もまだまだ沢山あった。想像していた以上に住むこ

とが許されていない区域も沢山あった。また、3日間で3人の方に震災当時の様子のお話しをお聞きし、辛く悲しい記憶を私たちだけでなくボランティアに来た沢山の人に、何回も何十回も語り伝える強さに胸がいっぱいになった。

3月11日から時間が経つにつれて、メディアの被災地の現状報道が減ると同時に直接の当事者ではない私たちの被災地に対する気持ちも薄れていってしまい、忘れてしまうことは悲しいことだと思う。被災者の方々もそれを恐れているとおっしゃっていた。まだまだ支援が必要なこと、今も尚被災地に残り懸命に頑張っている人たちがいることをより多くの人に伝えていくと共に、皆で忘れずにいることでさらにこれからの支援と復興につながっていくと思う。

実際に被災地に行き自分の目で見てくることができ本当によかった。関わることでできた全ての方々、本当にありがとうございました。

#### [自治労中川村職員労組・松下真奈]

今回、震災以降3度目の東北訪問。1度目は自分の目で被災地の状況を見るために。2度目は何か自分にできることを探すためボランティアとして。そこで実際に瓦礫撤去を行う中で復興にはまだまだ時間と色んな人の力が必要だと感じると共に、ほんの数時間の作業ではまだまだ足りない、見られていないことがたくさんあると感じ今回のツアーへの参加を決めました。

作業は、前回と同じ瓦礫撤去でしたが、震災から2年経つというのに、土を掘れば掘るほど次々と出てくる瓦礫たち。復興にはどれだけの労力と時間が必要なのだろうか？本当にこの地に人は帰ってこられるのだろうか？と様々な思いが出てきました。また、現地の方々のお話しを聞く中で、私達にはわからないほどの悲しみや苦しみを抱えながら必死にここまで来たということ。皆さんの気持ちを少しでも理解できたらと思いつつも、実際に経験していない私達はなかなか被災者の方の状況や気持ちを理解するのは難しいと改めて感じました。そんな中でも、私達のために話しをしてくださったり、感謝の言葉を伝えてくださり、被災された方々の方が色んな思いを感じながら頑張ってきているのにと、反対に感謝の気持ちを感じました。

震災からちょうど2年の特別な日に参加させて頂いたこと、現地の皆さんと一緒にボランティアを行った皆さんからも色んな思いやパワーを頂いたことに感謝し、これからも心の中に思いをとめていきたいと思いました。貴重な体験をありがとうございました。

#### 「一助を共助に」

#### [自治労中川村職員労組・伊藤 雪美]

3月9日(土)から11日(月)まで東北復興支援ボランティアに参加させていただきありがとうございました。

1日半、ボランティア作業に従事しました。南三陸町の志津川地区・上の山において、瓦礫の撤去と分別を行いました。(後に、被災者であり震災の語り部の方に、この“瓦礫”という言い方が被災者にとってどれほど傷つくものなのかというお話を伺いました。あれは瓦礫ではなく私たちの財産なのだ、直接お話を聞いて初めて気づくことができました。)1日目に悟りました。効率が悪すぎます。ひたすら手作業で、スコップとツルハシで固くなった土を掘って瓦礫を取り出しました。大きいものは、長さ3m以上もある原木や、じゅうたんやカーテンなど、小さいものはガラスの破片やおもちゃや生活雑貨のかけらなどありました。重機を使って掘り起こし、掘り起こした土の中から、仕分けをするのが誰が考えても効率という点から見れば良いのではないかと、国家公務員の給与を削減して

復興財源に充てたお金はきちんと運用されているのだろうか、という思いが頭をかすめました。

しかし、一方で、ボランティアにやってもらうのにちょうど良い作業選びって難しいんじゃないかとも思います。全国からたくさんのボランティアが集まりますが、誰もが気持ちは十分でも作業に関しては素人であって、素手一本でできることをやってもらうのが一番早いのかなと思います。それに、ボランティアの立場は、こういう風にやったらどうかと考えを持つものでもないのかもしれない。現地の人を求めることを、求めるやり方に従って黙々とやるのがボランティアだとも思います。日常においても、効率性ばかりを求めています。こうして、一つ一つを手作業で掘り出すことで、被災者の当時の生活に思いを馳せたり、自分の労力を被災者に捧げたいという気持ちを持つのも事実だと感じました。

1日目にお話を伺った「汐風」語り部の芳賀タエ子さんが印象的でした。おそらくボランティアとして来ている人たちに、毎日ではなくても定期的に自らの実体験をお話されていると思うのですが、お話のされ方が強く自分を鼓舞するような感じで、ちょうど震災から2年を明日に控えて、こみ上げてくるものがあるのを推察しました。「2年ということは3回忌にあたり、これを機にいつまでも泣いていられない、前を向かないといけない。」と泣きながらおっしゃっていました。また、「こうして語ることで自分の一助を全員の共助に繋げたい。」とおっしゃっていて、これこそボランティア精神ではないかと感じる瞬間でした。

3日目は、仙台市内から七ヶ浜町までをバスで見て回りました。津波で甚大な被害を受けたエリアは行政から「危険区域」に指定されていて、今後、住居を建てたり、住むことはできません。海岸から何キロも住居の基礎だけが残るエリアが続いていて、住宅密集地であったところは、ほとんど家が残っておらず、今後、人が住むことはありません。テレビで見るチェルノブイリの立ち入り制限エリアのように静けさに包まれていて、人の気配や活気を全く感じない場所が日本にもあるのだと思いました。福島原発周辺地域にも思いが及びました。

他のボランティアの中には、個人で参加されている方や、もう何回も被災地に足を運んでいる方もいて、感服する思いでした。海辺の突風の中を地面をじっと見つめ黙々と行う作業は楽ではありませんでした。でも、この作業も「一助」になっていれば、と思っています。お世話になり、ありがとうございました。

#### [電力総連関西電力労組木曾川支部・原 文彦]

今回の南三陸町復興支援ボランティアへ参加させて頂き、前回の七ヶ浜との違いにビックリさせられたというのが正直な感想です。

七ヶ浜の復興が完了しているとは言いませんが、南三陸町は東日本大震災から2年経つというのに、地上の大きな瓦礫が撤去されているだけで、土の中にまだ多くの瓦礫があり、復興がまったく進んでない事に驚き、復興支援の大切さを改めて感じました。

地元の方々は、「被災地の事を忘れ去られていく事が心配」と言っていました。

実際に被災地で感じ、復興支援で経験した事を会社の同僚や地元の仲間に伝え、被災地の現状とボランティアの必要性を伝え、東日本大震災の風化防止に微力ながら努めて行きたいと思います。

最後になりましたが、復興支援ボランティアという素晴らしいツアーを企画運営して頂いた長電観光及び連合長野の方々に感謝します。有難うございました。